

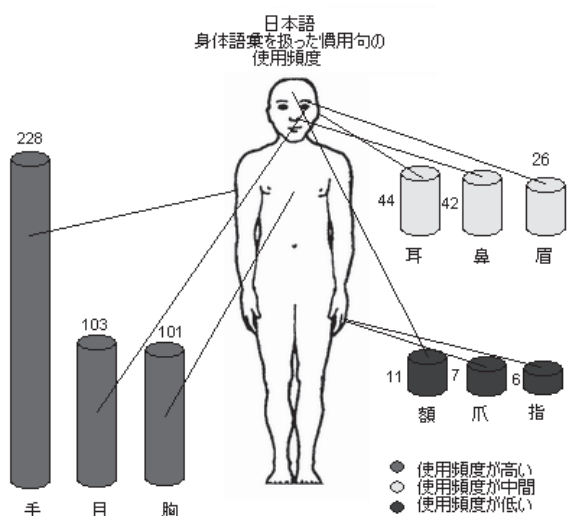
言語学の中に存在するリハビリテーション Rehabilitation that exists in Linguistics

長谷川 スベトラ イワノワ
Svetla Ivanova HASEGAWA

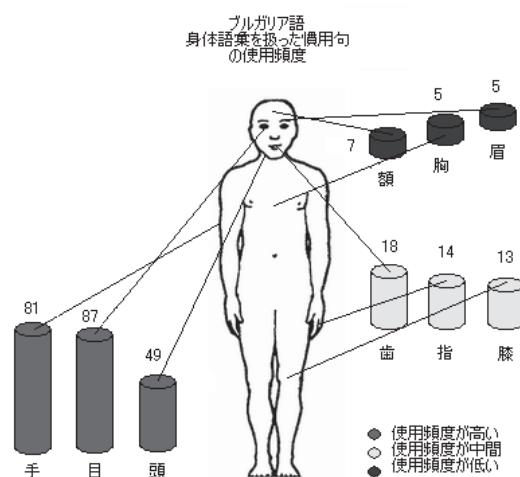
I. はじめに

言語学とリハビリテーションは一見関係がない様に見えるかもしれない。しかし、言語学の中に、特に身体語彙を扱った慣用句はリハビリテーションと関わりがあると筆者は考えている。本稿では、その関係を探る。

日本語とブルガリア語の身体語彙を扱った慣用句を中心に2ヶ国語のリハビリテーションに関わる表現について考える。慣用句の中で身体語彙慣用句は大きな部分を占めている。筆者が2002年に出版した辞典『日本語ブルガリア語の慣用句ことわざ辞典』と2005年に出版した2番目の書籍『日本語ブルガリア語の慣用句ことわざ』では約5割の表現は身体語彙を扱ったものである。したがって、数が非常に多く、言語において重要な意味を持っていると言える。日本語とブルガリア語でそれぞれの身体語彙を扱った慣用句の使用頻度は異なる。



<図 1> 日本語の慣用句



<図 2> ブルガリア語の慣用句

図1と2では、筆者が今まで行った身体語彙を扱った慣用句の研究から得た結果が載っている。日本語においては、手、目と胸を扱った慣用句が一番多い。それに対して、ブルガリア語では目、手と頭を扱った慣用句が一番多い。手と目は日本語でもブルガリア語でも共通している。何故ならば、両言語において、同様に人間の活動や感覚に関わる表現が多いからである。日本語では額、爪、指を扱った慣用句が一番少ない。ブルガリア語では歯、指と膝を扱った慣用句が一番少ない。

リハビリテーションに関わる表現は次の身体部位を扱っている：手、足、首、指、腰、膝等。いわゆる、運動体系に関わる身体語彙慣用句である。

II. 慣用句の定義

慣用句については、宮地裕の研究（1982）が知られている。その中に収められた「慣用句解説」に見られる定義は次のようになっている。

「慣用句という用語は、一般に広く使われているようだけれども、その概念がはっきりしているわけではない。ただ、二つ以上の連語体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉だという程度のところが、一般的な共通理解になっているだろう。」

『国語学大辞典』と『国語学研究辞典』においても慣用句は同様の角度から定義されている。

「いつも二つ以上の単語が一続きに、または相応じて用いられ、その結合が全体として、ある固定した意味を表すものをさす。」

（国語学大辞典、1980）

「いくつかの語を続けて、ある特定の意味を表すことが習慣的に行われている表現。」

（国語学研究辞典、1977）

つまり、慣用句というのは、簡潔に言えば：①二つ以上の単語から成り立つもので、②全体として、ある特別な意味を表すものである。

ブルガリアの言語学者もほぼ同じ概念規定をしている。

ヴァトフ・ヴァルバンによると、「慣用句というのは、ある特殊な意味を持つ語結合で、その意味は構成要素の意味に還元できないものである。」

ドゥリダノフ・イヴァンによると、「慣用句は石化された表現で、その意味は構成要素の基本的意味の和から類推出来ないものである。」

ニッチェヴァ・ケティによると、「慣用句というのは、語彙単位で構成されたもので、固定された意味を持つものであり、それぞれの語彙単位の意味が殆ど、またはある程度まで失われてきているものである。」

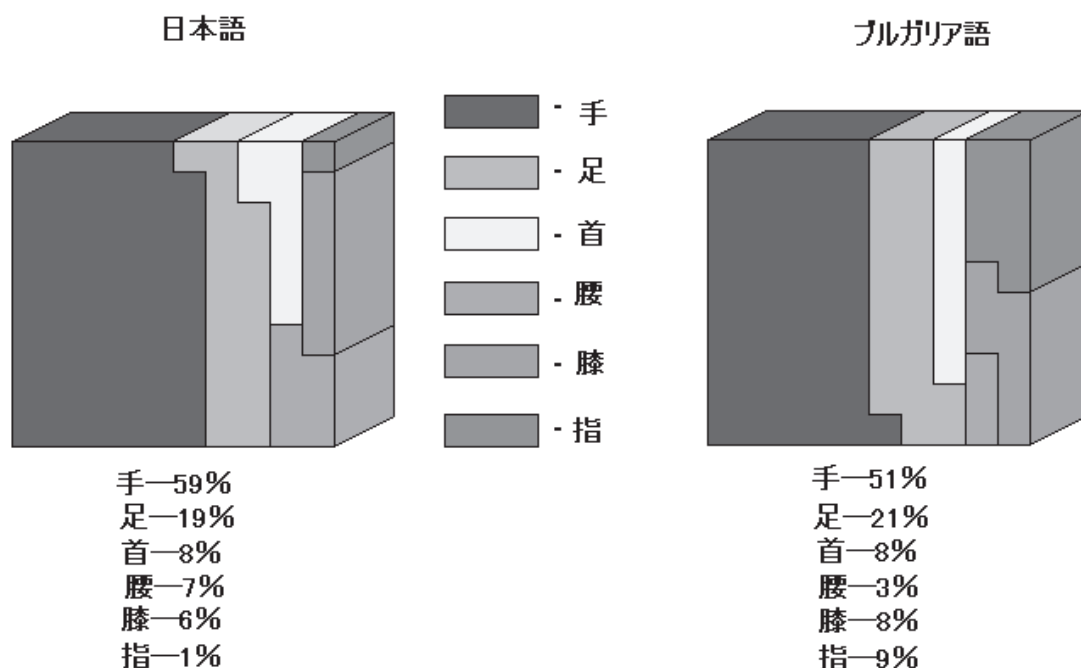
以上、日本語とブルガリア語の文献での慣用句の定義を取り上げた。上述の慣用句の捉え方の全てに共通して言えることは二つある。第1に、慣用句は特定の単語同士の決まった組み合わせの型があることと、第2に全体の意味は構成要素の意味に還元できないことである。

III. リハビリテーションと慣用句

運動体系に関わる身体語彙慣用句はリハビリテーションと密接な関係がある。図3では日本語とブルガリア語において、それらの表現の使用頻度を確認することが出来る。図から分かるように、両言語において、「手」を使った慣用句の割合は他の身体語彙慣用句と較べると数が非常に多い。日本語では59%であり、ブルガリア語では51%である。また、「足」を使った慣用句の割合は日本語において19%で、ブルガリア語で21%である。更に、ブルガリア語で3番目に数が多い慣用句は「指」を使った表現である。しかし、日本語では「指」の慣用句が一番数が少ない。残り3つの身体語彙（首、腰、膝）はほぼ同じ割合を占めている。

本稿では、リハビリテーションとは、特に身体的に最も適した生活水準の達成を可能にするものとする。両言語において、それぞれの身体語彙慣用句を使用頻度の高い表現から比較しよう。

運動体系に関わる身体語彙慣用句の使用頻度



<図 3> 運動体系に関わる身体語彙慣用句の使用頻度

1. 「手」を使った慣用句

手は人間の日常生活の中で、種々の作業を行うために用いる、動物の前足に当たる部分の名称であるが、労働の基本となる部分であるところから、労働力や、その技術まで広く意味するようになった。

ブルガリア語においては、「手」に当たる言葉が「raka」で、本論では、「て」と読ませた「手」と「raka」を比較する。日本語では、「手」を扱った慣用句は 228 個あり、ブルガリア語では、81 個がある。

こちらで、両言語で二種類の表現をみよう。手の機能が十分に果たすことが出来るポジティブな表現。そして、怪我等によって、何らかの原因で、手の機能が十分に果たすことの出来ないマイナス表現。

1.1 ポジティブな表現

日本語： 手が良いーやり方がうまい、しゃれている、たくみだ；字がうまい

ブルガリア語： 手が黄金であるーやり方がうまい、しゃれている、たくみだ

Zlatni mi sa ratsete

1.2 マイナス表現

日本語： 手が回らないー忙しい

ブルガリア語： 手が重いー仕事がうまくいかない

Imam teжка raka

両言語において、他の身体語彙慣用句と比較をすると、日本語では「手」を使った慣用

句は20%を占めており、ブルガリア語では16%を占めている。大昔、人間が生物として生き残るために、手は重要な役割を果たしてきた。人間は手のおかげでは移動だけでなく、食べ物の確保、身を守ることなど様々活動を行ってきた。

現在でも、ロボットや高度な技術の世界においても、手を完全に代わるものはない。

2. 「足」を使った慣用句

土肥直道（1996）は、「足が人間、動物の体を支え、かつ歩く部分である。これが変身して、歩くことや歩く方向などを表す。そこから、移動の手段を表す」と述べている。

両言語で足の機能が十分に果たすことが出来るポジティブな表現、そして、怪我等によって、何らかの原因で、手の機能が十分に果たすことの出来ないマイナス表現を比較しよう。

2.1 ポジティブな表現

日本語： 足を運ぶ一目的の場所へわざわざ行く。歩いていく。歩みを運ぶ。

ブルガリア語： 足を出す一どこかへ向かう

Povejdam krak

2.2 マイナス表現

日本語： 足が棒になる一長時間歩き続けたため、足が非常に疲れる

ブルガリア語： 足がない一長時間歩き続けたため、足が非常に疲れる

Nyamam kraka

運動体系に関わる身体部位には次のようなものがある：手、足、指、首、腰、膝である。

その中には「手」を使った慣用句が一番多く、次に多いのは「足」の慣用句である。

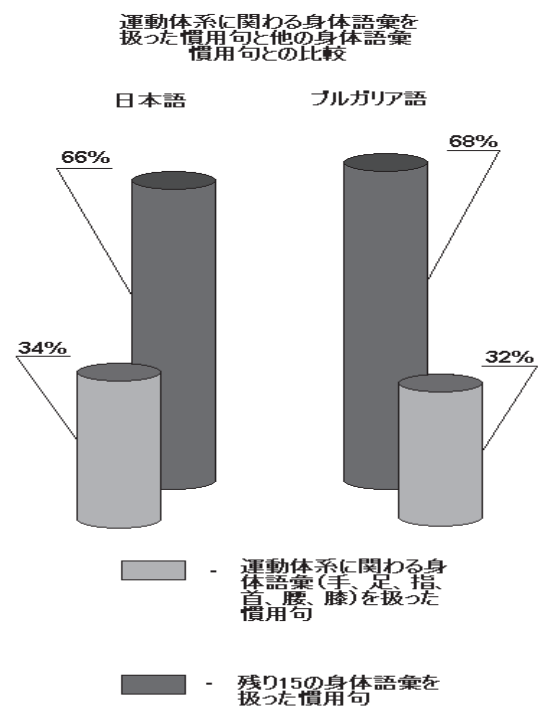
運動体系に関わる身体語彙を扱った慣用句は他の慣用句と比較して、日本語でもブルガリア語でもほぼ同じ割合を占めている。日本語では34%であり、ブルガリア語では32%である。

<図4>言語を超えて、運動体系の重要性を物語っている。人間の活動と一番密接な関係がある表現である。

3. 「首」を使った慣用句

首は、頭部と胴体をつなぎ、頭部を支えるが、野間佐和子（2000）では、「あたまは、「こうべ」とも言い、「くび」より上の部分を指すが、「くび」も、もともとは、「こうべ」と同源のことばで、音が変わり・交替した（kubi<->kobe）のだ」と言われる。ブルガリア語の「首」は、「vrat」に相当する。

手と足と同様に、両言語におけるポジティブな表現とマイナス表現を比較しよう。マイナス表現はリハビリテーションが必要な状態だと思われる。<図4>



<図4> 運動体系に関わる身体語彙を扱った慣用句と他の身体語彙慣用句の比較

3.1 ポジティブな表現

日本語： 首を長くする一望み、期待が早く実現して欲しいと思いながら待つ
ブルガリア語： 首を長くする一興味を持って、ある方向を見る、よく聞こうとする様子
Protochvam vrat

3.2 マイナス表現

日本語： 首が回らない一借金等のためどうにもやりくりがつかない
ブルガリア語： 首に卵が焼けている一解雇される、職をやめさせられる
Yaitse mi se peche na vrata

両言語において「首」の意味が共通しているのは、次の通りである。

- (1) 脊椎動物の頭と胴とをつなぐ部分。
- (2) 物の、くびの形をした部分。
- (3) 身体のくびより上の部分。かしら。あたま。こうべ。
- (4) 解雇すること。鹹首。

IV. おわりに

慣用句は日常生活における会話に欠かせないものである。どの言語においても慣用句は、その国の人たちの社会通念、思考形態、発想法などを豊かに表している。更に、慣用句に触れることでその言語の学習への興味と関心が高まる。

慣用句の中で特に身体語彙慣用句は数が多い。人間の活動や言語能力などに関わる。運動体系に関係のある身体語彙（手、足、首、腰、膝、指）慣用句はリハビリテーションとも共通点がある。リハビリテーションは身体的に最も適した生活水準の達成を可能にするので、それらの身体部位はリハビリテーションの対象となっている。その様な身体語彙慣用句は言語学の中に存在するリハビリテーションとも言える。

参考文献

- 1) 尾上兼英監修、1993『成語林』. 旺文社
- 2) 北村孝一、1987『世界ことわざ辞典』. 東京堂出版
- 3) キロワ スベトラ、2002『日本語ブルガリア語の慣用句ことわざ辞典』. シリウス4
- 4) キロワ スベトラ、2005『日本語ブルガリア語の慣用句ことわざ』. シリウス4
- 5) キロワ スベトラ、2006『身体語彙慣用句の日本語・ブルガリア語 対照的研究』名古屋大学大学院文学研究科 博士論文
- 6) 国語学会、1980『国語学大辞典』. 東京堂出版
- 7) 新村出編、1998『広辞苑・第五版』(CD-ROM版). 岩波書店
- 8) 土肥直道、1996『からだ語辞典』. 騒人社
- 11) 2000.『日本国語大辞典』. 小学館
- 12) 1981.『ブルガリア語辞典』. Bulgarian Academy of Science
- 13) 宮地裕、1985「慣用句の周辺」.『日本語学』1月号、明治書院
- 14) 森田良行、1985「動詞慣用句」.『日本語学』1月号、明治書院
- 15) Nicheva K., S. Spasova-Mihailova, Cholakova Kr..1975 Phraseological Dictionary of the Bulgarian Language Sofia